



北米での就職



マッギル大学 名誉教授

高根芳雄 (たかね よしお)

東京大学文学部心理学科卒業。Ph.D (ノースカロライナ大学)。マッギル大学で教授等を歴任。現在、ビクトリア大学でAdjunct Professor。専門は計量心理学。著書は *Generalized structured component analysis* (共著, Chapman and Hall/CRC Press) など。

1977年は本当に忙しい年だった。私はこの年の正月にUNCに戻り、1度経験したdissertation proposalのやり直し、博士論文本体の仕上げ、oral defense、就職探し、そして6月にはチャペル・ヒルでPsychometric Societyの大会があった。残りの半年も決して平坦ではなかった。私はこの頃までにはMcGill大学への就職が決まっていたが、カナダの入国ビザを取得するため7月早々一時日本帰国を余儀なくされた。9月上旬にはMcGill大学に着任、私はモントリオールに着いた翌々日から150人の学生を前に実験計画の講義を始めなければならなかった。

Job Hunting

私はUNCに戻った時すでに北米で就職したいという意向を固めていたが、就職探しは困難を極めた。私が自分の希望を伝えると指導教官だったYoung先生は当時北米で活躍する計量心理学者十数人に私を紹介する手紙を書いてくれた。自分のところに近々Ph.D.を取る学生がいるがもし適当な就職口があったら是非知らせしてほしいという趣旨の手紙だった。これに対して数人から返事が来たが、直接就職に結びつくようなものはほとんどなかった。当時は北米でも計量心理学の仕事は極めて稀で、私はAPA Monitorに載っている広告を見て30カ所ぐらい願書を出したが、このうち大部分は分野的にもあまり見込みのなさそうなところだった。この中で面接に呼んでくれたのはHouston大

学とCalifornia State大学の2カ所だけだった。そしてどちらの大学も私にjob offerをしてくれなかった。

McGillに就職できたのはラッキーだったとしか言いようがない。4月になり就職もほぼ諦めかけた頃、McGill大学のRamsay教授から電話があった。彼は先のYoung先生の手紙に対し返事をくれた一人だったが、それにはひょっとしたら自分のところで計量心理学のpositionが空くかもしれないと書いてあった。それが現実になったのである。私は早速願書を出し、その1週間後面接を受けにモントリオールに行った。その時、私はこの街についてもMcGill大学についてもほとんど予備知識を持っていなかった。私の第一印象は、4月の半ばだというのにモントリオールはまだ冬明け前で何となく索漠とした感じの街だった。ただ街のレストランで食べたステーキがとびきりおいしかったのを覚えている。

大学の面接ではまず自分の研究について1時間ほどtalkをさせられる。このtalkには大部分のfaculty memberが出席していて、研究の内容ばかりでなく、presentationの出来栄え、質問の受け答えなどが評価される。その後十数人の教授たちと個別の面談をする。これはだいたい1人30分ぐらいの枠で次々と面談し、その人の興味に合わせていろいろ質問されたり、逆に質問したりする機会が与えられる。これは1日で終

わらず2日に渡ることもある。夜には数人のfaculty memberと共にレストランで会食する。そこでの振る舞いも評価の対象である。したがって候補者にとっては緊張の強いられる2日間となる。

面接が終わると候補者は大学の決定を待つだけであるが、大学のほうは何人かの候補(通常3,4人)を面接し、誰にjob offerするか決めなければならない。北米の大学では通常positionが空くと、まず5,6人程度のmemberから成るsearch committeeが学科内に設置される。そのcommitteeが募集要項を定め、提出された書類に基づいて(通常vita, letters of reference, statement of research interest, statement of teaching interestなどを提出させられる)誰を面接に呼ぶか決める。面接が終わると候補者を総合的に評価し順位をつける。その時どの順位の候補者までがacceptableなかも決めることが多い。Search committeeのrecommendationはさらに学科内の最高議決機関に送られ、さらに審議が繰り返される。そこで承認されれば学科長は学部長に話を持っていき、学部長にも承認されて初めて学科長は選ばれた候補者に連絡をとり、雇用の条件などの交渉が始まる。このように北米の大学では何段階ものcheck pointがあり、自分の領域の人を雇うのでさえ個人の思い通りにはできず、誰かを雇いたいと思ったらそれを皆が納得できるように説得できなければならない。

これは後で聞いた話であるが、私の場合もすんなりとは行かなかったらしい。Search committeeの会合では私の英語力で果たして授業が満身に教えられるのかとか、統計のconsultantの役目が務まるかといったことが問題になったそうである。また当時私の研究領域とRamsay教授のそれがあまりにも近かったのでそのことも問題視されたようだった。Ramsay教授はそれに対し自分たち計量心理学者にも固有の研究領域があり、計量をやっているからといって学科内のstatistical consultantを一手に引き受けなければならぬというのは受け入れ難い主張らしい。結局その主張が通って、その時以来McGillの心理学科では専任のstatistical consultantを雇うことになった。私はそのおかげでstatistical consultantをやらないで済んだのである。研究領域のoverlapは必ずしも悪いことではない。むしろ同じようなことをやっている人がそばにいたほうが互いに刺激しあって良い面がある。Ramsay教授はもし研究領域のoverlapがそれほど問題であるならば自分はMDSの最尤解の研究を私に譲ってもよいとまで言ったそうである。私の英語力についてはその後どういふ話になったのか聞いたことはなかったが、私は授業が私の弱点と見られないよう準備には万全を尽くした。私はMcGillで教え始めてからほぼ10年後、Psychometric Societyの会長に選ばれた。このことを一番喜んでくれたのは他ならぬRamsay教授だった。というのは彼にとって自分が強く推したjob candidateが計量心理学会の会長に選ばれたということは自分の判断が間違っていなかったことの究極の証だっ

たからである。

McGillがたまたまアメリカでなくカナダにあったのは私にとって二重に幸いだった。一つには強力なライバルが大幅に減ったことである。アメリカ人はアメリカに就職口があるのならやはりアメリカに残りたいという気持ちが強い。アメリカ人にとってカナダの大学に就職するのは都落ちみたいな感じがするのであろう。またMcGillの仕事がopenしたのが遅く、この頃までには有力な候補は皆すでに就職が決まっていたことも私に幸いした。もう一つは私がフルブライトの奨学生だったことに関係する。この奨学制度にはプログラムの終了時点から少なくとも2年間はアメリカに戻ってきてはいけないという規則があり、もし私がアメリカで就職していたらこの規則をoverrideするのにかなりの労力を強いられたであろう。McGillがカナダにあったおかげで私は完全にこの問題を免れた。

いざ McGill へ

私は5月にMcGillからjobをofferされ、私はそれを一も二もなく受け入れた。これであとは全てうまくいくように見えたが、そうは問屋が卸さなかった。私はその年の初めに渡米したばかりだったこともあり、最初カナダのビザをアメリカで取ろうと思っていた。ところがそうするには8ヵ月もかかると言われた。そこで7月の初めに急遽日本に帰り、日本でビザを申請することにした。ところが日本に帰ってもビザの取得には最低3ヵ月かかると言われた。大学は9月に始まるので2ヵ月しかない。私は大学が始まるのに間に合わないとせっかく決まった就職がフイになってしまうのではないかと心配だった。何度もカ

ナダ大使館に足を運びこちらの事情を説明しようとしたが、いつも門前払いだった。そこで仕方なく両親が住んでいた地元の国会議員に頼んでカナダ大使館に圧力をかけてもらった。それでようやくminister's permitでカナダに入国できるよう取り計らってもらえることになった。

ところがいざ出発するという日、羽田空港に行くと、私がアメリカを通過するのに必要なtransit visaを持っていないという理由でロサンゼルス行きの飛行機の乗船を拒否されてしまった。私のitineraryではモンリオールに行く途中ロサンゼルスとシカゴの2ヵ所まで飛行機を乗り換えることになっており、そのためにはどうしてもtransit visaが必要だということである。これが1ヵ所だけだとvisaは必要なかった。私は何ともやりきれない気持ちで、transit visaを取り、パーになった切符の再手配をし、数日後ようやく渡航にこぎつけた。こうして私は授業が始まる前々日にやっとモンリオールに辿り着いたのである。何とも波乱含みの幕開けであった。

聞くところによるとカナダのvisaの問題は私の責任ではないのでそれによって雇用が解消されるようなことは有り得ず、問題があったのならそれを理由にもっと日本でのんびりしてくればよかったのと言われた。そうすれば1学期教えるのを免除されたのとも言われた。私はちょっと拍子抜けした思いだったが、現在では新任の教授は最初の学期は教えずによいことになっている。

Ph.D.を取ってからどういうところに就職するかはその人のその後のcareerを左右する一大要因である。私はいろいろな意

味で研究環境の整ったMcGill大学に就職できて実に幸運であった。McGill大学は2021年には創立200年を迎える伝統のある大学で、北米でも屈指の研究大学だった。読者の中にはMcGillの心理学科でPh.D.を取った卒業生（現在はUniversity College Londonで教えているO'Keefe教授）が昨年度ノーベル医学・生理学賞を受賞したのを覚えている方もいらっしゃるであろう。McGillの心理学科はfounderのD.O.Hebb教授の影響もあってもともと生理心理学の強い学科だった。1977年当時、この分野ではPeter Milner教授、painの研究で世界的に有名なMelzack教授がいた。近くにはBrenda Milner教授（やはりMcGill心理学科の卒業生）のいるMontreal Neurological Instituteがあった。McGillの心理学科にはそれ以外にも計量心理学のRamsay教授をはじめとして、auditory perceptionのBregman教授、社会心理学のLambert教授、言語発達のMacnamara教授など錚々たるmemberがそろっていた。特に自分に近い分野でRamsay教授のように世界的に著名な研究者がいたというのは実に幸運であった。彼はカナダのアルバータ大学で教育学の学位を取り、その後プリンストン大学のpsychometric fellowとなってPh.D.をわずか1年半で取ったという俊才である。そのような研究者の隣で30年もの長い間、自らを研鑽できたことは何事にも代え難い僥倖である。

既に述べたように私は授業の準備には最善を尽くした。『心理学ワールド』の57号でトロント大学の西里先生が「Ramsay教授が私のことをあれほど講義の準備に時間をかける人は見たことがない

と述懐していた」という話をされていたが、さもありなんと思われる。私は1回ごとの授業を自分のtalkと考えることにした。したがってその準備は自分のtalkを準備するのと同じぐらい力を入れた。1回が55分でそれを1日おきに1学期13週間続けるのは大変なことであるが、私はそれをやり通した。私はtalkの準備の仕方にも自分のやり方があった。英語のtalkが苦手だという人は是非一度試してみたい。まずtalkの内容に沿ってslideを用意する。それから一つひとつのslideについてしゃべるべき内容を文章化する。その段階でslideの内容を変えたり、順序を変えたりすることもある。そしてその文章をほぼ完全に暗記する。またその段階で文章をより自然なものに書き換えることもある。slideを見ながら暗記すると長さにもよるが大体2,3回で暗記ができる。後はtalkの時、それが暗記ではなくごく自然に話をしているように聞こえるまで練習する。そしてできれば誰かの前で声を出して練習させてもらう。私は今でもこのやり方をかなり忠実に守っている。それは自分の中に成功感覚があるからである。talkで次に何をしゃべるかがわかっていると質問に答えるのにも余裕が出てきて自信につながる。このやり方は自分の学生にも試してみたが、一度も失敗したことがない（私が本当にtalkの原稿を書いているかどうか疑う人は私のHPに行ってみるとよい。HPの後ろのほうにtalkのslideがdownloadできるようにになっているが、slideの後にはtalkの原稿も載せてある）。

正直言うと、私は長いことtalkするのが嫌で嫌でたまらなかった。上で述べたstrategyをもつ

てしてもtalkのたびにnervousになった。それがPh.D.を取ってから7年も続いた。ところが転機は意外と簡単に訪れた。1984年、1回目のsabbaticalからMcGillに戻った時、数学科でtalkを頼まれた。その時のtalkは自分でも感心するほどうまくいった。私はそれ以来talkでnervousになることはなくなったのである。

研究を重視する大学では如何に研究時間を捻出するかが重要課題となる。McGillの心理学科はteaching loadが低いことでも恵まれていた。1年で2コース教えればよく、1コースは週3時間の授業で、1学期13週間から成る。私は2コースを1つの学期に集中して教えることにしていた。すると、夏休みを含めて残りの39週間は研究に専念できる。

総括

私はこれまで殆どのことを短期決戦で乗り切ってきた。ここでいう「短期」とは長くて3年程の期間を指す。それ以上の長期的な展望を持って行動してきたことはあまりない。私はこれまで人生の岐路に立って自分の進むべき道についてあれこれ悩んだという経験がない。こういう生き方をしてきた、1度だけ危険なギャンブルをする羽目になったことがある。それは今から20年程前のことで、年老いた両親の世話をどうするかという問題だった。結局私は大きなリスクを覚悟で両親をカナダに呼び寄せた。この時も迷いはなかった。「盲、蛇に怖じず」とはよく言ったものである。